

NCC 宗教研究所 ニュース

〒602-8011 京都市上京区烏丸通下立売上ル桜鶴門町 380
 振替：01060-6-2555
<http://www.japanese-religions.jp>

Tel: (075) 432-1945 Fax: (075) 432-1946
 E-mail: studycen@mbox.kyoto-inet.or.jp
<http://nccisjpnw.wixsite.com/nccisjp>

コロナ禍に思うこと

新型コロナウイルス感染症

は、わたしたちに計り知れない負の影響を与えています。日本では、第一波の山は何とか乗り越えることができたというものの、まだ各地で続く感染者、また隠れ陽性者の存在もあり、今後の再拡大や第二波の心配もあります。

人類の歴史は、感染症との闘いの歴史といわれます。当面の感染症をワクチンや治療薬の開発によって制圧しても、次の新しい感染症が発生する……、その繰り返しの中でしたたかに、あるいは幸運にも生き残ってきたのが人類だといわれています。感染症は、人類の都市化・集中化により存続の場を得てきました。宗教の多くは、もちろんキリスト教も、都市型社会で発展してきた集団です。

新型コロナウイルス感染症の影響下、教会は、根本的な存在の変革を求められているように思います。この感染症の力を、圧倒的な力で抑え込まない限り教会の活動形態は、大きく変わっていかざるを得ないと思わ

れます。

関 雅人

二〇年前の話です。作家の林望氏が、イスタンブールを旅してイスラムの礼拝に参加した時の経験を語っていました。自身は無宗教者といい、礼拝の意味も作法もわからないまま、案内人がわたしのするのをまねていればよいといわれただけの参加であつたということです。が、大きなモスクを埋める人たちと一緒にフリスを祈りか呪文かわからない導師の声に、無条件の宗教的感動、えもいわれぬ共感を覚えた……ということです。

もう一つ、これはごく最近の話。茶道の指導者の「コロナ禍によって茶の湯という文化がなくなってしまう」と深刻に嘆いている声を聞きました。濃茶点前というのがあります。抹茶というと普通に思うのは薄茶点前ですが、茶会のフルコースの一つです。抹茶茶碗に練られたお茶（薄茶は点てるといいますが、濃茶は練るといふのだそうです）を、参加

した客全員が回し飲むのが作法です。これは、千利休がカトリックのミサにヒントを得て編み出したもので、当時お茶といえは濃茶のことであつたといわれます。参加者は少人数ですが、同じ茶碗から飲むことで「我らは一つ」という思いが強くなつていくのを狙つたものでしょう。

イスラムだけでなく、ほとんどの宗教は、大勢の者たちが一堂に会して祈りをささげ、なんらかの儀式に参加することによって、宗教的な伝達となされ、組織化されていく……都市型宗教です。宗教にはオンライン動画配信では達しえないことがあります。知的な部分により信仰を理解し伝達することも大切としたうえで、宗教的伝達を崩してしまう状況に、教会はどう向きあつていけばよいのか。

やがて新型コロナウイルスが克服されることを期待しています。しかしこのコロナウイルスは、今後ともしたたかに残つていくのではないかと。そこで、新しい生活スタイルが必要という

ことも言われます。

教会は、礼拝時に声を出さずに賛美する、聖餐式を中止する、説教（宣教）を短くする、さらにはリモート礼拝等、知恵を絞って使命を果たそうとしてきました。しかしその程度の対応では間に合わない、結局はギリ貧になつてしまふ。そうであれば、教会の在り方そのものを根本的に考える必要があると思ふのです。たとえば礼拝について、その守り方について、たとえば教勢や財政について……。教会員や礼拝出席が何名、献金額がいくらという統計のだし方を考えなおさねばならないでしょう。さらには、伝道は会員獲得や教勢拡大が主目的ではないにせよ、少なくとも人を集めて……型の伝道は困難になるのではないかと。

今まで教会が、教会の生命線と考えてきた様々の在り方にメスを入れなければならない……と、なかなか答えの出ないことを、日々考えています。

（理事長）

「声」と聖書のリアリティ
 エキメニズムに関する雑感

土井健司……………2
 岩野祐介……………3

「声」と聖書のリアリティ

土井健司

ようやくコロナ禍も落ち着いてきたと思っていれば、油断できない状況になりつつある。それでも街に活気が戻ってきた様子に安堵を覚えるところであろう。このコロナ禍とは何なのか。さまざまに考えさせられている。

コロナ禍のはじまった三月以降、教会は通常の礼拝を止め、あるいはオンライン配信をし、あるいは賛美歌を控えるなど工夫をしてきた。ひたすら願ったのは、礼拝のたんなる中止ということだけは避けてほしいということであった。三月にキリスト新聞に寄稿したのもこの思いからであった。しかし何が礼拝の本質であるのか、何があれば礼拝になるのか。ひとつの場所に招かれ集うことが難しくなったところで、聖書朗読、説教など、聖餐式を毎回執行しないプロテスタントの礼拝にとって、この問題は答えるのにむずかしいと思った。

なお感染症についてキリスト教の歴史を繙くなら、二五一年から二六二年にかけてロー

マ帝国内を流行した「キブリアヌスの疫病」というものがある。ローマ帝国のおよそ三分の一の人間のいのちを奪ったといわれる。この時の様子については、カルタゴの監督キブリアヌスとアレクサンドリアの監督ディオニュシオスがそれぞれ書き残したものがあり、その次第が伝わっている。専門的に研究した論考もあるが、一般的なものとしては『福音と世界』六月号に「大ディオニュシオス―疫病蔓延期を生き抜いた監督」を寄稿したので、お読みいただければと願う。また、エウセビオスが伝える一七七年にリヨンにおいて生じた苛烈なキリスト教迫害は『教会史』第五巻一章、「アントニヌス朝の疫病」による社会不安が原因であったのではと感じている。ただし、これは証拠が見つけられず、研究者としての直観にすぎない。

さて、コロナ禍のなか Zoomなどの同時双方向型、あるいはリアルタイムのオンライン装置も礼拝のために利用され、かなり面白いとおもった。とはいえ今でもかなり苦手なのだが、

使ってみると、同じというわけにはいかないものの、礼拝に集う感覚をもつことができた。考えてみて、その理由は「声」のリアリティだと気がついた。もしパソコンや iPad からまったく話者の「声」が聴こえて来なかったら、あるいは何か機械的な音声に変換されて聴こえてくるのであれば、話している人が同じ場にいるような感覚にはならないだろう。その意味で「Zoom」を使ったチャット等は確かになにかしら繋がりを感じられるものの、同じ場に集う、その人が語っている、というリアリティにはならない。

ところで現在の研究課題のひとつが「声」なのだが、それは、聖書を書かれた文字テキストとして捉えるのではなく、「声」として理解することの意義を教父の思想に尋ねようとするものとなる。具体的には四世紀のニュッサのグレゴリオスとその兄バシレイオス、そして友人のナジアンゾスのグレゴリオスについて研究をしている。

古代教父の時代には礼拝に出席する者一人ひとりが聖書を持参するのではなく、会堂に備えられた聖書を読者が朗読し、皆がその声を聴くことで御言葉を経験していた。おそらくその声

によって会堂に集う一人ひとりの絆も確認され、神の下に招かれている経験をしたのである。そのような「声」というもののリアリティを、奇しくも今回の同時双方向型のオンライン装置は伝えていたといえる。あらためて「声」というものが人を結びつけ、それによって臨在のリアリティを生み出すことを認識した。

昔、大学生のころ、神学部で旧約学を教えてくださった城崎進先生は、礼拝で聖書を朗読するときは決して言い間違えてはならない、とおっしゃっていた。よく準備をして、分らない漢字は調べ、声をだして繰り返し練習をするように求められた。どうしてか？先生がおっしゃるには、なぜなら「あなたを通して神の声が鳴り響く」からであり、神は言い間違えないからだという。その時は、そんなものかと思つたが、歳を重ねるとなるほどそうであるべきだと思うようになっていく。そのため礼拝で司会者が言い間違えるのは堪えがたく、少しでも練習すればと残念に思う。

ニュッサのグレゴリオスの書いたものを読んでみると、ときどき聖書を指して「神の声」（ディア・フォォーネー）と表現して

いる。いまはギリシア語文献について膨大なデータベースが用意されていて、ホメロスから十五世紀のビザンツ帝国滅亡までの文献について検索ができるようになっていく。調べたところでは、ニュッサのグレゴリオスは六十八回この言葉を用いている。一つひとつ調べてみると、そのうち五十五例が聖書を指して「神の声」として使う。まだ研究上ではあるのだが、今ひとつ報告できるのは、一例を除き、他のすべてにおいて「神の声」が主語のときは現在形を使っていること。つまり「神の声」は「語つた」とは言わず、「語っている」「語る」と言うのである。このことは特徴的であつて、今まさに神の声が自分たちに語りかけているという経験を言っていることになる。聖書の言葉は、決して過去の言葉ではなく、いままさに語られている、生きた言葉だということになる。

声と文字については、オングの古典的研究がある。W・J・オングの『声の文化と文字の文化』（桜井直文他訳、藤原書店、一九九一年）では、声として語られることばと、文字として書かれたことばの違いが多角的に論じられている。声としてのこ

とば(の文化)が決して原始的で未熟なものでなく、また書かれた文字(の文化)が決して優れているわけでもない。両者に優劣があるわけではなく、それぞれ特色が数々あり、オングはそれらを描き、あらためて声の重要性を浮き上がらせている。声の文化の特徴としてオングはいくつかのものを挙げるが、そのひとつに「感情移入のあるいは参加的であって、客観的に距離をとらない」というものがある。オングは言う。「声の文化にとつては、学ぶとか知るということは、知られる対象との密接で感情移入的で、共有的な一体化をなしとげるということの意味する。つまりそれと一緒になるということである。書くことは、知られる対象から知る主体を切りはなし、そうして客観性の条件を打ち立てる」(一〇一頁)。聖書の言葉も、本来そのような「声の文化」に属するものであったように思われる。

今日私たちは礼拝にいくと、持参した聖書をひらいて司会者の朗読に合わせて目で追うようになっている。これは書かれた文字を読む行為であって、私たちにとって聖書は「テキスト」

になってしまっている。しかし聖書の言葉のリアリティは、書

かれた文字にはなく、語りかけられる言葉の経験にある。さまざまな思いをもって礼拝に出席し、聖書の言葉に耳を傾ける、ときにその言葉にハッとしたり、モヤモヤした自分の気持ちの整理がついたり、勇気をもらったり、一条の光を感じたりする。そのような経験は、テキストというものからは得られない。生ける神との交わりとしての礼拝であれば、聖書は聴かれるものであって、読まれるものではないののではないか、そのように感じている。すなわちパウロが言うところの「文字は殺し、霊は

エキクメニズムに関する雑感

NCC宗教研究所はエキクメニカルな研究所である。母体のNCC、キリスト教協議会もまさにエキクメニカルな組織である。ここでのエキクメニカルとはもちろん、教派を超えて、という意味である。

日本のキリスト教、特にプロテスタントにおいては、幕末の宣教開始以降、概してこのエキクメニカル性が強いように思われる。その後教派に分かれるとはいえ、日本基督公会という

生かす」(第二コリント書三章六節)である。

コロナ禍にあつてオンラインを使った礼拝が、奇しくも「声」というもののリアリティを感じる機会を与えてくれたように思う。いま礼拝を再開する教会も多くなった。同時双方向型のオンライン装置は非常の手段であつて、やはり皆が一所に集まるのがよいと思う。ひとつの場所に集められ、司会者の聖書朗読を聴きながら、「神の声」に接することで、その恵みをしっかりと覚えていきたい。

(副理事長)

岩野祐介

形態で教会を形成しようとしたこと、翻訳社中による聖書の日本語訳など、教派を超えた協力がなされてきている。聖書翻訳は、現代ではカトリックまでを含む新共同訳、聖書協会共同訳などへとつながる試みであるといえる。日本という、それまでの鎖国・禁教していたあたらしい宣教地へ向かうにあたり、教派間で足を引っ張り合うようなことがないよう、協力できるところは協力しよう、という流

れになったことは、理解できることである。

最近、ある書物を読むなかで、この、エキクメニカル性について、改めて考えることがあつた。何のためのエキクメニズムか?ということである。

その書物とはJ・D・スマー ト『教会の教育的使命 キリスト教教育の基本的原理の反省』(安村三郎訳、一九五八、日本基督教団出版部)である。原書は一九五四年のものである。確かに古い書物であるが、現代の視点から読んで面白い部分も色々とあつた。一九五〇年代

のアメリカ合衆国で、教会学校のあり方についてかなりの危機感が抱かれていたというのは興味深いことである。自由主義とファンダメンタリズムの分裂

「教会の人間観が国家の市民に期待するものと相反」(一〇九頁)することについて、スマー トは警鐘を鳴らしている。

一九五〇年代であるから、ナチス・ドイツの記憶は鮮明である。スマー トは、ドイツでキリスト教と国家主義との混乱があつたように、アメリカ合衆国においても、「アメリカ式国家主義と教会との混同」(一二九頁)が起り得る、という。二〇二〇年現在のアメリカ合衆国

の状況を思い起こさせることばである。そしてスマー トは、「最近の事であつたが、日曜学校教師たちの大集会で、三人の指導的講師が口をそろえて共産主義に抗してアメリカ的生活を守らねばならぬと叫んだ。彼らにとつてはアメリカ式生活様式とキリスト教が同一であるということが公理であつた」(一三〇頁)と記すのである。

教会学校(日曜学校)運動はしばしばエキクメニカルなはたらきの代表例として挙げられるように思う。世界日曜学校協会の世界大会は一八八九年ロンドンで開催された。一九二〇年には日本で第八回大会が開催され、財界・政界も巻き込んで大いに注目されたのである。

そういった背景に、エキクメニカルな協力により、社会主義に向き合うという意図があつたのではないか、ということである。日本では、エキクメニズムについて、純粋に「教派の違いを超えるのはよいことである」と認識しがちではないかと思う。しかしそこに「反共産主義」、あるいは「反イスラーム」といったイデオロギー的なものが入り込む可能性については、つねに注意深くあらなければならぬ。 (副所長)

賛助会費・クリスマス募金・特別献金（寄付金）報告

2019年4月1日～2020年3月31日（順不同・敬称略）

いつも研究所のためにお祈り下さり、ありがとうございます。またご寄付くださった方には、心から感謝申し上げます。研究所の運営は皆様のお志によって果すことができます。どうか研究所をお支えくださいますようお願い申し上げます。

賛助会費

關岡一成	10,000	日本聖公会京都聖マリア教会	10,000
西田多戈止	10,000	シーラ・ノーリス	10,000
オリエンス宗教研究所	10,000	日本聖公会聖光教会	10,000
田辺明子	10,000	荒井 仁	5,000
樋口 進	10,000	山本俊正	5,000
谷口 寛	5,000	日本キリスト教会吉田教会	5,000
高田英明	5,000	芦名定道	5,000
鶴 良雄	5,000	日本キリスト教会西宮中央教会	5,000
関西学院大学キリスト教と		カトリック・レデンブートル修道会	5,000
文化研究センター	5,000	日本バプテスト同盟	
荒井 仁	5,000	城陽バプテスト教会	5,000
大田敬光	5,000	菅 恒敏	5,000
那須英勝	5,000	南山宗教文化研究所	5,000
斉藤洋子	5,000	日本聖公会京都聖三一教会	5,000
重岡奈津子	5,000	日本聖公会富山聖マリア教会	5,000
間瀬啓允	5,000	日本基督教団洛陽教会	5,000
角田 健	5,000	日本聖公会聖アグネス教会	5,000
森井敏晴	5,000	日本基督教団松戸教会	4,000
岡田正彦	5,000	本河みぎわ	3,000
立石昭三	5,000	高田英明	3,000
武智守数	5,000	日本基督教団佐渡教会	3,000
ルーテル学院大学図書館	5,000	国際シャローム・キリスト教会	2,000
南山宗教文化研究所	5,000	藤井勇次	2,000
大谷光真	5,000	カトリック芦屋教会	1,000
ペトロ・クネヒト	5,000		
島田 恒	5,000		
坂内宗男	5,000		
井出千束	5,000		
今井牧夫	5,000		
日沖直子	5,000		
日本基督教団京都教会	5,000		

クリスマス献金

権 甲植	30,000		
関西学院宗教活動委員会	15,000		
日本基督教団京都丸太町教会	15,000		

特別献金（寄付金）

日本基督教団京都教区	50,000
宮庄慎治	30,000
クラウス・シュペネマン	8,100
日本バプテスト同盟	5,000
小林洋一	5,000
鈴木 祈	5,000
氣多雅子	3,000
岡村直子	3,000
山崎俊生	3,000
武田多美	3,000
竹内信義	1,000

編集後記

三密、マスク、ソーシャル・ディスタンシング、オンラインなど新しい生活様式への変化は、研究所も例外ではない。各宗教教団の連携である教団付置研究所の今年の大会は、オンラインの会議によって開催中止となった。一九年目になるISIPも運営委員会で協議を重ねた結果、今秋の実施を見送り、三名の参加予定者は来年にスライドしてもらったことにした。二〇一一年の大震災・原発事故の際はドイツからの一方的な派遣中止だったが、今回の世界的なパンデミック（ギリシャ語のパン＝すべて＋デーモス＝人々）といわれる感染拡大で、世界中の人々が未知の病気の怖れと収束への不安のなかにある状態では止むを得ない選択だと思う。人間の恐れや不安に立ち向かうことが宗教の大切なはたらきであることを改めて覚えて、諸宗教の理解と対話のための活動も新しい日常への対応を模索しなければならない。この「研究所ニュース」は一九九一年以来の五〇号となる。一つの区切りを越えて、新しいという名による切り捨てや同調圧力に流されることがなく活動が続けてゆきたい。

(T・M)